

安史の乱直前の唐の外征及び対外政策

—七五一年の三つの大敗に象徴される唐の内政・外政の異常化の様相—

菅 沼 愛 語

はじめに

安史の乱（七五五―七六三年）については、これまで唐朝内部の権力闘争や節度使体制など、唐王朝の内政の乱れに主としてその勃発の原因を帰してきた。^①この様な内側の乱れは、外交等の多様な面に現れている。本稿では、安史の乱直前の唐の対外戦争や外交政策を取り上げ、安祿山の挙兵する数年前から既に唐の対外政策が異常性を帯びていた点を明らかにしたいと思う。

安史の乱直前に起こった、唐の外交政策の破綻を如実に示す出来事として、筆者が注目したのは、天寶十載（七五二）、唐が南詔・大食・契丹との戦いに各々大敗した事である。即ち、天寶十載四月、劍南節度使の鮮于仲通が南詔王閣羅鳳との戦いに大敗し、七月には安西節度使（安西都護）の高仙芝がタラス河畔の戦いで大食（アラブ）に大敗し、八月には平盧・范陽・河東の三節度使を兼任する安祿山が契丹との戦いに敗北した。タラス河畔の戦いは、製紙法の西伝とい

う世界史上・文化史上でも著名な出来事であるが、この戦いと同じ年に、唐は、南方で南詔、北方で契丹に各々大敗している。とりわけ南詔との戦いにおいて、唐は八万の軍勢のうち六万を喪失し、軍事的な打撃を被っただけでなく、この戦いを機に南詔が唐から離反し吐蕃に臣従してしまった為、唐にとっては外交的にも大きな痛手となった。一年の内に異なる三つのフロンティアで大敗するという事は、唐の歴史の中では前例のない出来事であり、唐の軍事・外交が異常な事態に陥っている事を物語るものである。唐が同じ年に三つも大敗を重ねてしまった要因として考えられる点は、主として二つあると筆者は推察する。一つは唐王朝の外交戦略の拙劣さであり、一つは前線指揮官の質の低下である。

七〇〇年代～七三〇年代の唐は、例えば、西方の吐蕃と北方の突厥に対応する為に二正面作戦の回避を心がけるなど、巧みな外交戦略によって周辺諸国に臨んでいた。そして、南詔については、開元二十六年（七三八）、玄宗が王の蒙婦義を冊立し、吐蕃を牽制させた。しかし、天寶十載（七五一）、唐は、南方の南詔、西方の大食、北方の契丹の三方面で大敗を重ねており、七〇〇年代～七三〇年代の唐の対外戦略と比較すると、七五〇年代の唐は統制のとれた行動を取っていない。それどころか、親唐であった南詔を吐蕃に寝返らせてしまうなど、唐の外交政策が狂い始めている事が見て取れる。

また、大敗した前線指揮官、安祿山・高仙芝・鮮于仲通の戦い方にも拙劣さが窺える。即ち、安祿山（平盧・范陽・河東の三節度使を兼任）は、玄宗の行幸に併せて契丹を撃破して皇帝に阿りたいという姑息な動機から、契丹が反乱を企てていると誣告を行い、謀反者を征伐するという大義のもとに契丹を討伐した。しかし、安祿山は郷導の奚軍に裏切られ、奚軍と契丹軍に挟撃されて大敗した。安西節度使の高仙芝は、石国（タシケント）を騙して和約を結んだ後、油断していた石国を襲撃して王を捕縛し、財宝等を略奪した。高仙芝の横暴に対し、近隣のソグデアナ諸国が怒り、大食に援軍を懇願した為、高仙芝は恆羅斯（タラス）城で大食軍を迎え撃つが、カルルクが大食に寝返った為に唐軍は

敗北した。また、南詔との戦いに敗北した劍南節度使の鮮于仲通は、楊国忠の腹心で、国忠の推薦によって戦いの前年の天寶九載（七五〇）、劍南節度使に就任したばかりであった。鮮于仲通は蜀の大富豪であり、楊国忠の縁故で節度使に就任したに過ぎず、軍事・外交に疎く、南詔王閣羅鳳の謝罪を無視し、大軍による力攻めで南詔を攻撃し、その結果、六万もの兵を喪失して大敗した。この様に、天寶十載（七五一）の三方面での敗戦は、各々の前線指揮官の定見の無さも敗北の要因にあつたように思われる。また、玄宗が、周辺諸国への征服戦争を好んだ事、戦績を挙げた將軍を寵愛する事なども、前線の將軍達が軍功に逸る背景にあつたように思われる。安祿山などは、皇帝の機嫌を取る為に、必要と思われる戦いを契丹に仕掛けていた。

更に、筆者は、唐が南詔・大食・契丹に大敗した翌年の天寶十一載（七五二）、唐の中央政界でも反逆事件等が起こっている点にも注目した。天寶十一載三月、朔方節度副使の阿布思が反乱を起こし、四月には京兆尹の王鉞が反逆罪により自殺に追い込まれ、その後、宰相の李林甫が、楊国忠によって、この二つの反逆事件に関わっていたと糾弾され、十一月に病死している。阿布思は、突厥の滅亡直前に唐に亡命してきた鉄勒の首長であり、朔方節度使を務める李林甫の副使（副官）であつた。京兆尹の王鉞も李林甫の腹心であり、このため李林甫は二つの事件に関わっていたと誣告されたのであつた。実は、阿布思を反乱に駆り立てたのは安祿山であつた。また、王鉞の反逆事件を告発し、李林甫を誣告したのは楊国忠であつた。この後、安祿山は阿布思の軍団を吸収して唐内で随一の精鋭を有するようになり、楊国忠は王鉞の官位（京兆尹）と李林甫の官位（右相）を継承して政界のトップに登り詰めている。また楊国忠は、南詔で大敗した劍南節度使の鮮于仲通が自分の腹心であつた為、この敗戦を隠蔽し、大規模な徴兵を行い、躍起になって雪辱戦の準備に取り掛かっている。この様な状況より、筆者は、南詔で大敗した楊国忠と契丹で大敗した安祿山が、各々敗戦の責任を問われる事を恐れ、敗戦の翌年の天寶十一載、先手を打って李林甫・王鉞・阿布思らを失脚させた可能性もある。

るのではないかと推察する。

本稿では安史の乱が勃発する四年前（七五一年＝天寶十載）に起こった唐軍の悲惨な三つの大敗を取り上げ、これを中心^②に据えながら、この前後の唐の外政と内政の推移を見ていきたいと思います。尚、タラス河畔の戦いについては優れた先行研究があるので、本稿では、主として南詔と契丹に対する唐軍の戦い、七五二年の権力闘争に焦点を当てる。

天寶三載（七四四）～天寶十四載（七五五）の契丹・南詔・吐蕃及び中央アジアでの唐の軍事行動については〔年表1〕、天寶八載（七四九）～天寶十二載（七五三）の中央政界の権力闘争と唐の外征・対外政策については〔年表2〕、唐と吐蕃との戦いについては〔年表3〕、唐と南詔の戦い及び吐蕃の南詔支援については〔年表4〕、節度使職の変遷については〔表1〕、節度使職の兼任については〔表2〕にまとめた。年表と表は、論文の最後に附したので随時参照されたい。

第一章 七〇〇年代～七三〇年代の唐の外交戦略と周辺国家の動向

七世紀末から八世紀初頭にかけて唐にとって対外政策の中心は、西方の吐蕃と北方の突厥（第二可汗国）であった。

吐蕃と突厥は唐にとって非常に脅威であった上に、この二国は連合して唐を襲撃する事もあり、唐は西方と北方の両勢力に対抗する為に、七一〇年以降、節度使を設置して边防を強化すると共に外交戦略を駆使し、二正面作戦の回避に努めた。その詳細については別稿^③で論じたので、本章では、唐が七〇〇年代～七三〇年代に吐蕃・突厥に対して行った対外戦略として以下の四つの対応策を挙げ、簡潔にまとめる。

①神龍二年（七〇六）～景龍四年（七一〇）、唐は吐蕃と和睦し、突厥対策に専念した。

唐は、神龍二年吐蕃と会盟（神龍会盟）し、景龍四年、金城公主を降嫁させた。その一方で、唐は、神龍会盟を締結した同じ年（七〇六）の十二月以降、相次いで突厥対策（募兵、要塞構築等）を行って突厥に対して兵力を集中

し、景龍二年（七〇八）～景龍四年（七一〇）には、反突厥であつた突騎施・キルギスと連合し、突厥への包圍攻撃を計画した。

②開元十五年（七二七）～開元十七年（七二九）、唐は突厥と和睦し、吐蕃を集中攻撃した。

唐と突厥は開元十五年、突厥可汗ビルゲ（毗伽）による吐蕃の密書献上を契機に和睦し、絹馬貿易を通じて良好な親善関係を築く。これにより唐は北方情勢を憂慮する必要がなくなり、開元十六年（七二八）から十七年（七二九）にかけて吐蕃に対し河西・隴右で波状攻撃を加えた。唐軍は、青海東南にある吐蕃の要衝石堡城を奪取する等の戦果を挙げ、すべての戦いで勝利を収めた。このため吐蕃は開元十八年（七三〇）、唐に和睦を請願し、これ以降、唐・吐蕃は戦闘を停止して和睦交渉を行った。

③開元十八年（七三〇）～開元二十三年（七三五）、唐は吐蕃及び新羅と和睦し、突厥・契丹・渤海の北方連合に対処した。

開元十八年、契丹の牙官可突干が反乱を起こして親唐の契丹王を殺害し、突厥・渤海と連合して唐に対抗した。唐は、開元十八年より吐蕃と和睦交渉を行って会盟し（開元会盟）、国境（青海西南の赤嶺）を劃定して境界碑（赤嶺碑文）を建て、吐蕃と休戦した。西方戦線が終息した為、唐は対吐蕃戦で善戦した將軍達を北方戦線に異動させ、開元二十年（七三二）～開元二十三年（七三五）、契丹及び突厥と戦った。また、唐は、開元二十一年（七三三）と開元二十二年（七三四）、新羅に渤海征伐を命じ、渤海対策を新羅に任せる事で、突厥と契丹への対策に専念した。この様に、唐は、吐蕃・新羅を味方にする事で突厥・契丹・渤海連合との戦いを有利に進めた。

④開元二十六年（七三八）以降、唐は吐蕃包圍網を形成し、吐蕃の西域侵攻に対応した。

唐の北方情勢が沈静化しつつあつた開元二十二年（七三四）以降、吐蕃が、突騎施と通婚し、カシミール西北の小勃律を攻撃する等して西域への侵攻を再開した為、唐は開元二十六年、開元会盟を破棄し、南詔王・康国王・史国

王らを冊立して吐蕃への包囲網を形成し、河西・隴右・劍南の三節度使に吐蕃を一斉に攻撃させた。以上の様に、七〇〇年代～七三〇年代の唐は、軍事力の行使と共に、対外戦略も巧みに活用して、西方の吐蕃、北方の突厥に対処し、その作戦は概ね成功を収めた。

第二章 開元末～天寶初期の外征と内政

本章では、七〇〇年代～七三〇年代の唐の外交政策との相違点や悪化している点などにも注意しつつ、開元末から天寶十載（七五一）に至るまでの唐の内外の情勢をまとめる。

（一）開元末～天寶初期の唐の外征及び周辺諸国の情勢

この時期には、吐蕃と並んで唐にとって脅威であった北方の突厥第二可汗国が、天寶四載（七四五）に滅亡する。その後、北方アジアで唐の脅威になった部族は契丹であったが、玄宗は契丹対策の前線司令官として安祿山を寵任し、次に祿山に権力と兵力を集中させていく。一方、西方の吐蕃に対する唐の攻略は順調に展開し、劍南・青海・パミールで吐蕃の進撃を阻止する。このため吐蕃は活路を見出す為、南詔への派兵を開始する。

（1）突厥の滅亡

突厥は、七世紀末に再興して以来、契丹や渤海等とも結び、吐蕃と並んで唐の脅威となったが、ビルゲ可汗の暗殺後、幼君が相次いで政局は安定しなかった。開元二十九年（七四一）に登利可汗が叔父の左殺に殺されると、玄宗は、突厥の周辺諸族バスマル・ウイグル・カルルクを招諭して突厥を攻略した。天寶三載（七四四）にはバスマルが突厥の烏蘇米施可汗を攻め殺し、首級を長安に伝えた。突厥人は烏蘇米施可汗の弟を推戴して白眉可汗となしたが、玄宗は突厥の

混乱に乗じるよう、朔方節度使の王忠嗣に出兵を命じた。また玄宗は、ウイグルの骨力裴羅が自立すると、裴羅を懷仁可汗に冊立して後押しした。ウイグルは突厥の故地を占拠すると、天寶四載（七四五）、突厥の白眉可汗を攻め殺し、首級を長安に献上した⁽⁴⁾（『旧唐書』卷一九四突厥伝、『新唐書』卷二一五突厥伝、『資治通鑑』卷二四・卷二一五）。この様に、唐は周辺諸族と連繫して突厥を牽制するという七〇〇年代―七三〇年代の外交政策を⁽⁵⁾実行し、突厥の周辺部族（バスマル・ウイグル・カルルク）を支援して、かつて強敵であった突厥を滅亡へと導いたのであった。その後、突厥を滅ぼしたウイグルが新たにモンゴリアに建国したが、建国後、間もない事もあり、新興のウイグルは当面は唐の強い脅威にはならなかった。

（2）契丹対策の司令官安祿山の台頭

突厥滅亡後、北方アジアの脅威となった勢力は北東部の契丹であり、平盧節度使や范陽（幽州）節度使が対契丹戦を担当した。天寶元年（七四二）からは安祿山が平盧節度使を務めた。

安祿山は、ソグド人を父に、突厥人を母に持つ混血児として突厥に生を受けた。開元四年（七一六）、突厥可汗の默啜が横死した時、混乱を避け、突厥から唐に亡命した。安祿山は營州（遼寧省）の柳城に移住し、その地で語学の才と商才によって互市牙郎となった。幽州節度使の張守珪は、勇敢で、地元の地理にも詳しい安祿山を重宝し、養子とした。開元二十四年（七三六）、安祿山は平盧討擊使・左驍衛將軍に任じられるが、契丹・奚に敗北し、敗戦の責任を問われて長安に送られた。玄宗と宰相の張九齡が、安祿山を処刑するか否かを巡って対立したが、玄宗は安祿山を助命した。この一件で安祿山は玄宗の目にとまり、開元二十八年（七四〇）に平盧兵馬使、翌二十九年（七四一）には營州都督・平盧軍使となり、天寶元年（七四二）平盧節度使となった。安祿山は、長安から平盧に使者が来るたびに彼らに賄賂を贈り、玄宗の機嫌をとった。安祿山は、天寶三載（七四四）から范陽節度使を兼任し、天寶十載（七五一）以降は更に

河東節度使も兼任し、契丹対策の最高司令官となった。ただ、河東節度使に就任する際には、安祿山の方から玄宗に節度使職をねだっている（『旧唐書』卷二〇〇安祿山伝、『新唐書』卷二二五安祿山伝^⑥）。節度使職の変遷については（表1）、節度使職の兼任については（表2）にまとめた。安祿山は、平盧節度使を十四年間、范陽節度使を十二年間、河東節度使を五年間務め、二節度使（平盧・范陽）を十二年間、三節度使（平盧・范陽・河東）を五年間各々兼任している。兼任した節度使の数だけ見ると、王忠嗣が一時、四つの節度使職を兼任した事があったが、四節度使を兼任した期間は数ヶ月と短い^⑦。また、一つの節度使職を十四年間もしくは十二年間も務めたのも安祿山だけである。節度使職の任期と兼任数を他の節度使と単純に比較しただけでも、安祿山に対する玄宗の寵任が破格であった事が分かる。

安祿山と契丹の戦いについては、『新唐書』安祿山伝に「（安祿山）見天子盛開邊、乃給契丹諸酋、大置酒毒焉、既酣、悉斬其首、先後殺数千人、献馘闕下。（安祿山は、玄宗が盛んに辺境地帯を切り拓いているのを見て、契丹の酋長達を欺いて宴会に呼び、酒に毒を盛り、酔ったところで彼らの首を斬り、前後数千人を殺して首級を玄宗に献上した。）」とある。また、『資治通鑑』卷二一五・天寶四載九月条には「安祿山欲以辺功市寵、数侵掠奚・契丹、奚・契丹各殺公主以叛、祿山討破之。（安祿山は辺境で戦績を挙げて玄宗の寵愛を得ようとし、しばしば契丹・奚に侵攻し略奪した。そのため（天寶四載九月）奚・契丹は各々の公主（静樂公主と宜芳公主）を殺して反乱を起こした。安祿山は、奚・契丹を討伐し撃破した。）」とある。こうした記述から、玄宗が周辺諸国との戦争を好んだ事、安祿山が軍功を挙げて玄宗の寵愛を得ようとした事、安祿山の戦い方が卑劣である事、安祿山の侵略が原因で契丹・奚が唐から降嫁してきた公主を殺害した事などが分かる。公主の降嫁とそれに伴う対外的な好誼は唐の重要な外交の一形態であり、本来は中央政府が担当する領域である。しかし、前線指揮官の安祿山の無軌道な行動は二人の公主を死なせ、外交的領分を侵すものであった。この様な挙を許してしまう点、この時期の唐王朝は、少なくとも契丹・奚に関しては、前線での動きを統御できず、

結果、外交的な戦略の欠如と判断されても仕方が無い状態になっていた。尚、安祿山は、この後も、天寶十載（七五二）に「契丹の酋長が謀反を企てている」と誣告し、玄宗の行幸にあわせて契丹への遠征を開始しており（後述）、玄宗に阿るために契丹攻撃を開始している。

（3）唐の吐蕃対策（年表3）

玄宗は開元二十六年（七三八）、吐蕃との国境赤嶺に立石した境界碑（赤嶺碑文）を破壊して開元会盟を破棄し、河西・隴右・劍南の三節度使に吐蕃を攻撃させた。この時期の唐は、主として、劍南（四川）方面、青海方面、パミール方面で吐蕃への攻略と攻撃を行った。^⑧ 各々の戦線での唐軍の対吐蕃戦を以下にまとめる。

唐はまず、劍南方面において、開元二十八年（七四〇）、安戎城（四川省茂県西南）を六十年ぶりに吐蕃の手から奪還した。^⑨ 安戎城は、高宗が儀鳳二年（六七七）、吐蕃の侵攻を阻止する目的で築いた要塞であったが、調露二年（六八〇）吐蕃に奪取され、大理盆地の西洱諸蛮はみな吐蕃に帰順した。玄宗は、安戎城を奪還する為に自ら作戦を立案する程、奪回戦に意欲を示した。唐は、安戎城を奪還後、同城を平戎城と改名し、吐蕃を退けた（『旧唐書』卷一九六吐蕃伝、『新唐書』卷二二六吐蕃伝）。

次いで、青海方面、パミール方面での唐の吐蕃攻略について見る。西域及び中央アジアに向かう為の吐蕃の進撃ルートは主として二つあり、一つは青海、一つはパミールであった為、唐は、この二方面を攻略して吐蕃の進撃を阻止しようとした。青海方面での対吐蕃戦は、隴右節度使の哥舒翰が担当し、積極的に攻勢に出た。天寶七載（七四八）、哥舒翰が青海に神威軍を築いて吐蕃軍を撃破し、青海の中の龍駒島にも築城した為、吐蕃は青海に近付かなくなった（『資治通鑑』卷二二六）。哥舒翰は、天寶八載（七四九）には吐蕃の要塞石堡城を攻撃した。石堡城は青海東南にある吐蕃の重要な軍事基地であり、唐は開元十七年（七二九）に一旦、吐蕃の手からこの要塞を奪い取った。唐が石堡城を奪取

した事も契機となり、吐蕃側は和睦を請願し、唐と吐蕃の間で開元会盟が行われた。しかし、開元二十六年、唐・吐蕃間の戦争が再開すると、吐蕃軍は同城を唐から奪い取り（開元二十九年＝七四一）、青海南の堅固な軍事拠点とした。哥舒翰は天寶八載（七四九）六月、麾下の隴右の軍勢に加え、河西の軍勢と、朔方節度副使阿布思の軍勢、それに朔方・河東の兵力も併せ、およそ六万三千の軍勢でもって石堡城を奪還し、同地を神武軍となして吐蕃への防御を更に強化した。こうして吐蕃と直接対戦する傍ら、唐は、吐蕃の衛星国と化していたカシミール西北の小勃律（ギルギット）⁽⁹⁾や羯師（チトラル）⁽¹⁰⁾に対しても攻撃を仕掛け、親吐蕃の王達を捕縛し、小勃律と羯師を親唐国家とした。尚、小勃律と羯師に対する遠征を成功させたのは、タラス河畔の戦いで有名な將軍高仙芝であった。小勃律は、吐蕃にとってはバミール經由で西域に進撃する際の門戸に相当した為、唐は、開元十年（七二二）より小勃律の掌握を心がけていたが、開元二十五年（七三七）、吐蕃は唐の勸告を無視して小勃律を攻撃した。吐蕃の小勃律攻撃も要因となつて、開元二十六年、唐は吐蕃への攻撃を再開した。吐蕃は開元二十八年（七四〇）小勃律王の蘇失利之に王女を嫁がせ、親吐蕃派の重臣達に政權を掌握させた。玄宗は田仁琬、蓋嘉運、夫蒙靈督らに小勃律を征伐させたが、いずれも失敗した。しかし天寶六載（七四七）、安西副都護の高仙芝は奇襲攻撃によって小勃律を攻略し、吐蕃派の首領達を斬り、蘇失利之と妻（吐蕃王女）を捕虜として玄宗に献上した。小勃律は唐に帰順し、近隣の二十餘国も唐への入貢を再開した。高仙芝は、小勃律攻略の功により安西節度使に昇進した（『旧唐書』卷一〇四高仙芝伝、『新唐書』卷二二小勃律伝、『資治通鑑』卷二一五）。また、天寶八載（七四九）、吐火羅（トカラ）が遣使上表し、近隣の羯師が吐蕃と共謀して攻撃してくると訴えたので、玄宗は天寶九載（七五〇）、高仙芝に羯師を討伐させ、王の勃特没を捕縛させると、勃特没の兄を冊立し、羯師を親唐国家とした（『新唐書』卷二二吐火羅伝、『資治通鑑』卷二一六）。尚、護蜜（ワハン）は天寶元年（七四二）吐蕃から唐に帰順し、識匿（シグナーン）は天寶六載、唐の小勃律遠征を支援した（『新唐書』卷二二護蜜伝・識匿伝⁽¹²⁾）。こ

の様に、唐は、吐蕃の近隣諸国を親唐政権となして吐蕃への包囲網を固めるという七〇〇年代～七三〇年代の作戦を継続する事によって、パミール方面で吐蕃の封じ込めを図ったのである。

以上の様に唐による吐蕃攻略は着々と進展したが、天寶年間に入り、唐が雲南経営を積極的に推進すると、南詔がこれに反発し、吐蕃と結んで唐への抗戦を開始する。唐による雲南経営の積極化と、南詔の反唐意識の高まりについて次節で見たと思う。

(4) 南詔の動向(唐への反抗と吐蕃への接近)

唐は、天寶五(七四六)～六載(七四七)頃、交州・安南都護府(現ハノイ付近)に至る歩頭路を開発し、塩産地確保の為に混州西に安寧城を建築し、天寶八載(七四九)には保寧都護府を新設して雲南への支配強化を図った¹³⁾『資治通鑑』卷二一六。唐は、開元二十八年(七四〇)、劍南方面で安戎城を吐蕃より奪還し、天寶六載以降、パミール方面・青海方面でも吐蕃攻略を成功させており、雲南に対しても積極策を推進したと思われる。

玄宗は、開元二十六年(七三八)、南詔王の皮羅閣を雲南王に冊立して蒙婦義の名を与え、天寶七載(七四八)、皮羅閣の息子閣羅鳳が王位を継承すると閣羅鳳を冊立して、南詔を懐柔した。対する南詔も、唐の爨姓部族攻撃に協力し、唐と南詔は良好な親善関係を保持していた。しかし、唐が強圧的な雲南攻略を推し進めると、南詔は唐への反感を募らせていった。そして天寶九載(七五〇)、閣羅鳳は姚州都督張虔陀の横暴に激怒し、姚州(雲南省)を攻めて張虔陀を殺害すると、夷州三十二州を唐から奪取したのであった¹⁴⁾『旧唐書』卷一九七南詔蛮伝、『新唐書』卷二二三南詔伝、『資治通鑑』卷二一六。

この状況を受けて、吐蕃は天寶十載(七五一)より南詔に派兵した。吐蕃は青海・パミール・劍南で各々唐軍に苦戦していた為、南詔を支援し、唐への反撃の機会を窺ったと考えられる。一方の南詔は、東の唐、西の吐蕃という二大強

国の狭間にある関係上、唐だけでなく吐蕃とも親善関係を築いていた。⁽¹⁵⁾ 南詔にとって、唐と対立する上で吐蕃からの軍事支援は強みになったと思われる。七五一年（天寶十載）、鮮于仲通が南詔遠征を開始する直前の情勢は以上の様なものであり、仲通は南詔と対決するにあたって吐蕃への対策も十分に考慮する必要があったわけである。鮮于仲通の南詔遠征とその失敗については、第三章で詳しく見たい。

（5）まとめ

天寶初期の唐の対外政策をまとめると、突厥と吐蕃に対する政策は、七〇〇年代―七三〇年代の外交政策を継続して順調に展開しているが、契丹や南詔に対しては、前線の將軍（安祿山）や都督（張虔陀）の拙劣で強圧的な対応が契丹や南詔を激怒させ、唐に対する抗戦の引き金になっている。つまり、突厥・吐蕃という従来のフロンティアに対しては、従来行ってきた応戦方法や外交戦略の経験がある為、唐は効率よく、この二国を攻略する事が可能であり、突厥を滅ぼし、吐蕃の進撃路を遮断する事ができた。しかし、新しいフロンティアである契丹・南詔に対しては唐も軍事・外交の経験が浅く、また担当する指揮官も適性を欠く人材であり、契丹・南詔を侮って高圧的な応対をした。このため、唐は契丹・南詔での戦争と外交に失敗してしまったと思われる。

（二）中央政界の悪化（激化する権力闘争と玄宗の俗悪化）

本節では、天寶初期から天寶十載に至るまでの唐の中央政界の状況や玄宗の弊害について概観し、唐の中央が相当に悪化していた点を具体的に示したいと思う。

（一）李林甫と楊国忠

私利私欲に駆られた宰相（右相）の李林甫は、保身の為に玄宗に讒言を繰り返しては、おのれの脅威となる有能な宰

相や名將を次々に失脚させた。張九齡、裴耀卿、嚴挺之、王忠嗣、裴寬は左遷され、韋堅、皇甫惟明は左遷後に殺害された。皇甫惟明や王忠嗣を肅清する際に李林甫に加担した楊慎矜も、その後は目障りになった為に肅清対象となり、自殺した（『旧唐書』卷一〇六李林甫伝、『新唐書』卷二三李林甫伝）。また、李林甫は、節度使の経験者が中央政界に戻ってきた際に宰相になる事があつた為、ライバルの出現を阻止する目的で異民族出身者を節度使に任命するよう玄宗に進言した（『旧唐書』李林甫伝、『資治通鑑』卷二二六）。これが安祿山（ソグド人と突厥人の混血児）、高仙芝（高句麗人）、哥舒翰（突騎施人）等の節度使就任に繋がり、異民族出身の將軍が、各フロンティアの前線司令官として唐の対外戦争だけでなく重要な外交政策も担当する契機となった。李林甫は政敵を次々に肅清すると、陳希烈を左相となした。陳希烈は御しやすい人物であつたので、李林甫は自分で全て決裁し、陳希烈は林甫の決定をただ承諾するだけであつた。天寶八載（七四九）、李林甫の専横を憂慮した趙奉璋が、林甫の罪二十カ条を書き上げ、林甫の告発を試みたが、李林甫は先手を打って趙奉璋を殺害し、この企てを未然に防いだ。

しかし、天寶四載（七四五）、楊玉環が貴妃に冊立され、玄宗の寵愛を一身に受けるようになると、従兄の楊国忠が外戚として新たに台頭し、李林甫と対立するようになった。楊国忠は、天寶八載（七四九）、李林甫の片腕であつた京兆尹の蕭炅を収賄罪で告発して左遷し、翌年の天寶九載（七五〇）四月には、李林甫に厚遇されていた御史中丞の宋渾を収賄罪で告発し、流刑に処した（『旧唐書』卷一〇六楊国忠伝、『資治通鑑』卷二二六）。天寶八載、趙奉璋の告発を未然に防ぐ事ができた李林甫も、腹心の蕭炅・宋渾を救えなかつた。そうした意味では、天寶八載より楊国忠の権力が李林甫に伯仲し、林甫の脅威になったと言える。

（2）玄宗の俗悪化

ここでは、政治面、軍事面、外交面、人事面における玄宗の弊害を見たいと思う。玄宗は、開元末頃から李林甫の讒

言を信用し、有能な宰相や名將を次々に左遷もしくは処刑していったが、これが中央政府の無能化、無秩序化を促進した。玄宗は軍功を挙げた將軍を好み、過度な褒賞を与えたがった。例えば、開元二十三年（七三五）、幽州節度使の張守珪が契丹征伐に勝利した時、玄宗は守珪の戦功を嘉し、宰相に取り立てようとしたが、この時は宰相張九齡の反対にあって断念している（『資治通鑑』卷二二四）。また、玄宗は自ら作戰も立案した。例えば、開元二十七年（七三九）、益州司馬防御副使の章仇兼瓊が、吐蕃から安戎城を奪還するよう献策したところ、玄宗は章仇兼瓊を益州長史に拔擢し、自らも取城之計を発案して、開元二十八年（七四〇）、安戎城を吐蕃より奪還した。この時、李林甫は上表して玄宗の秘策を賛美し、玄宗もまた自身の奇策を誇った（『旧唐書』吐蕃伝）。玄宗は、「四夷を吞む志を抱き」（『資治通鑑』卷二一六・天寶六年条）、「盛んに辺境地帯を切り拓いた」（『新唐書』安祿山伝）と評されるように、周辺国家への征服戦争を好むようになった。こうした皇帝の強い征服欲、戦績を挙げた將軍を過度に賞賛する玄宗の嗜好が、安祿山や高仙芝を対外戦争に駆り立てる一因になっていたと思われる。更に、玄宗は寵愛する人物に気前よく大権を授与するという愚を犯した。特に安祿山に対しては三つもの節度使職を与えて寵遇し、甘やかした。一人の將軍に権力と兵力を集中する事は非常に危険であったが、玄宗自身はその事に思い至らず、また諫言できる人物も玄宗の側にいなかったのである。

第三章 天寶十載（七五二）の唐軍の三つの大敗…南詔での大敗、タラス河畔の戦い、契丹での大敗

本章では、唐の外征や対外政策の異常化を象徴する出来事として、七五一年に起こった唐軍の三つの大敗（鮮于仲通の南詔での敗戦、高仙芝のタラス河畔での敗戦、安祿山の契丹での敗戦）を各々取り上げ、戦闘に至るまでの背景や戦争の動機、戦争の推移、敗戦後の対応、敗戦の原因などについて見ていきたいと思う。

（一）南詔征伐の失敗（天寶十載（七五二）四月）〔年表3〕〔年表4〕

天寶九載（七五〇）、南詔王の閣羅鳳が姚州都督の張虔陀を攻め殺し、夷州三十二を唐から奪取した。翌年の天寶十載（七五一）四月、劍南節度使の鮮于仲通が八万の軍勢を率いて南詔を征伐するが、南詔はこれを撃破する。この戦いを機に南詔は唐から離反して吐蕃に臣従し、唐は吐蕃牽制の為の重要な同盟国を喪失した。その意味で、この戦いは軍事的にも外交的にも重要な一戦であつたと言える。尚、漢文史料では、吐蕃が南詔に派兵した詳細にはふれられていないが、南詔側の史料（南詔德化碑）によれば、吐蕃が、七五一年（天寶十）、七五三年（天寶十二）、七五四年（天寶十三）に南詔に派兵した事などが記されている。南詔・吐蕃連合軍が唐軍を撃破した点については、藤澤義美氏、林謙一郎氏、大原良通氏が南詔德化碑も活用し考察した。大原氏は更に吐蕃側の史料（敦煌出土のチベット語編年記・吐蕃王の伝記）と南詔側の新史料（格子碑）も活用した。¹⁶ここでは先行研究の成果も取り入れつつ、天寶十載の唐と南詔の対立と戦争、吐蕃による南詔支援、この戦いと楊国忠との関わりについて見る。

（1）楊国忠と劍南節度使鮮于仲通

鮮于仲通は、蜀の大富豪であり、章仇兼瓊が劍南節度使の時、采訪支使を務めており、かつては失職中で貧困に苦しむ楊国忠の面倒を見ていた。章仇兼瓊が、李林甫の肅清を恐れ、中央政界とのパイプを求めたので、鮮于仲通は楊国忠を兼瓊に推薦した。楊貴妃が玄宗の寵愛を得ていた為、章仇兼瓊は楊国忠を気に入る、国忠に財宝を与えて長安に赴かせた。楊国忠はこれに報いる形で、天寶九載（七五〇）、鮮于仲通を劍南節度使に推挙した（『新唐書』卷二〇六楊国忠伝、『資治通鑑』卷二二五）。尚、楊国忠は、この前年の天寶八載（七四九）から李林甫の腹心蕭炆を肅清し始めており、自派の鮮于仲通を要職に就ける事で政界での勢力拡張を試みたと思われる。

（2）唐軍の大敗と南詔の吐蕃への臣従〔年表4〕

天寶十載（七五一）四月、鮮于仲通は八万の軍勢を率いて南詔遠征を開始した。南詔王の閣羅鳳は、鮮于仲通に遣使

して謝罪し、吐蕃の大軍が国境地帯に迫っているのも、もし唐が南詔を許さないのであれば南詔は吐蕃に帰順すると告げた。しかし鮮于仲通は南詔を許さず、使者を捕らえ、閣羅鳳の居城大和城に迫った。このため閣羅鳳は鮮于仲通を迎え撃ち、唐軍を大破した。唐軍の死者は六万人に及び、鮮于仲通は遁走した（『旧唐書』南詔蛮伝、『資治通鑑』卷二一六）。尚、南詔德化碑には、南詔の救援要請に応じて吐蕃が軍勢を派遣した事、閣羅鳳が王子と重臣の子弟六十人を吐蕃に派遣して戦勝を報告し、吐蕃に対して謝意と忠誠を表明した事、天寶十一載（七五二）正月、吐蕃が閣羅鳳を「贊普鐘（吐蕃王の弟）」となした事、南詔が七五二年を贊普鐘元年と改めた事などが記されている。¹⁷吐蕃が閣羅鳳を「贊普鐘」「東帝」となし、金印を授けた点については、『新唐書』南詔伝、『資治通鑑』卷二一六にも見えるが、ただ、閣羅鳳はこの時、国門に碑を立て、碑の上に「わが国は代々唐に仕えて封爵を授かっていた。後世、唐に帰服した時、この碑を指して唐の使者に示し、私の謀反は本心ではなかった事を知らせたい。」と刻み、唐からの離反が本意ではなかった事を記した。閣羅鳳は、唐軍との戦闘が始まる前にも鮮于仲通に遣使して謝罪し、唐軍との対戦の回避を試みている。こうした事から、七五二年の時点では、閣羅鳳も唐の出方次第では唐からの離反を思い留まるつもりだったのかも知れない。

以上の様に、南詔の去就は吐蕃対策とも連動しており、唐は、外交戦略も含めて、もつと慎重に南詔に対応すべきであった。しかし、南詔対策の責任者鮮于仲通は元々蜀の富豪であり、楊国忠の推薦で劍南節度使に就任したばかりでもあった為に、軍事・外交に疎く、南詔との和解の機会を喪失してしまう。その結果、唐軍は敗北を喫し、南詔も吐蕃に帰属した。南詔は、徳宗時代の貞元九年（七九三）に唐に再び帰順するまで約四十年間吐蕃に臣従し、吐蕃から徴兵を受けて唐を攻撃する事となる。

（3）楊国忠による敗戦の隠蔽と雪辱戦の為の大徴兵

楊国忠は南詔での大敗を隠蔽し、鮮于仲通の戦功を叙した（『資治通鑑』卷二一六）。しかし、敗戦の隠蔽は前例のない行為であった。楊国忠は、鮮于仲通が自分の腹心であったので保身の為に敗戦を隠したと思われる。この後、楊国忠は南詔への雪辱戦を期し、躍起になって両京及び河南・河北で大規模な徴兵を行った。『資治通鑑』卷二一六・天寶十載四月条によれば、楊国忠は御史を分遣して人を捕らえ、枷を付けて兵營に連行するなど強制的な徴兵を行った。¹⁹また、楊国忠は同年十一月、鮮于仲通に推挙させて自らが劍南節度使に就任した。楊国忠は、自身が就任する事で劍南及び南詔に関する軍事・情報等を直接掌握しようと考えたのであろう。この後、楊国忠は、おのれの采配で、七五二年と七五四年に南詔征伐を行うが、それについては章を改めて述べたいと思う。

（二）タラス河畔の戦い〔天寶十載（七五二）七月〕

天寶十載七月には、高仙芝がタラス河畔で大食と対戦し、敗北した。本節では、前嶋信次氏の研究成果に基づきながらタラス河畔の戦いの前後の状況を簡単に概観する。

タラス河畔の戦いの導火線となった出来事は、天寶九載（七五〇）の高仙芝による石国攻略であった。石国王が突騎施の内紛に干渉した²⁰ので、玄宗は高仙芝に石国征伐を命じたのである。天寶九載十二月、高仙芝は石国王を騙して和約を結び、石国王を油断させた後に同国を襲撃し、王達を捕虜とし、老弱な者達を殺害して財宝等を略奪した。このため、石国王の息子は諸胡（ソグディアナ諸国の同胞達）に高仙芝の横暴を告げた。諸胡は激怒し、大食に加勢を要請して安西四鎮の襲撃を計画した。これを知った高仙芝は、蕃漢三万の軍勢を率いて大食を迎え撃ったが、カルルクが叛いて大食と共に唐軍を挟撃したので、高仙芝は大敗した。唐軍は兵卒の多くが戦死し、生き残ったのはわずかに数千人のみであった（『新唐書』卷五玄宗紀、『資治通鑑』卷二一六）。

タラスでの敗戦後、玄宗は高仙芝を右羽林軍大將軍・密雲郡公に任命した（『新唐書』高仙芝伝）。この様に高仙芝は

タラスでの敗戦後、敗北の責任を問われて罰される事はなかった。しかし、唐ではこれまで大敗を喫した將軍に対しては、概ね、官職剥奪、降格処分、死刑等の処罰を加えており、今回の高仙芝のように、処罰もせずに新たな官職を与えるのは異例であった。こうした点を見ても、この時期の唐が人材配置に関する重要な要素である賞罰を厳格に行っていない事が分かる。尚、タラス河畔の戦いの後、指揮官の高仙芝が処罰されなかった事などを根拠に、この敗戦が唐にとって死活問題という程の重要性はなかったと解釈する先行研究もあるが、唐にとつては、タラス河畔の戦いと同年にあった南詔と契丹での二つの大敗の方が、より重要で深刻であった為、高仙芝の敗戦が、さほど問題視されなかったという可能性も充分に考えられる。

(三) 契丹遠征の失敗〔天寶十載(七五二)八月〕

ここでは、安祿山の契丹遠征の失敗について取り上げ、安祿山の戦争動機、戦争の経緯等について見る。

天寶十載(七五二)二月、安祿山は河東節度使に任命された。安祿山が玄宗に対し、河東節度使の職を希望したので、玄宗はこの願いを聞き入れ、河東節度使の韓休岷を左羽林將軍に転任させ、安祿山に河東節度使の職を与えたのである。これにより、安祿山は平盧・范陽に加えて河東の節度使職も兼ね、三つの節度使を兼任する事になった。尚、この時期、複数の節度使職を兼任している人物は安祿山以外にはいない〔表2〕。また、安祿山は、天寶十載(七五二)の時点で、平盧節度使を務めること十年、范陽節度使を務めること八年であったが、この当時、同一の節度使職をこれほど長期間に亘って務めた人物も、安祿山以外にはいない〔表1〕。

天寶十載八月、安祿山は、平盧・范陽・河東の軍勢を率いて契丹遠征に赴いた。安祿山の率いる兵力は、『資治通鑑』卷二一六・天寶十載八月条では「六万」、『旧唐書』卷二〇〇安祿山伝では「十五万を号す」と記されており、史料によって戦力が異なるが、いずれにせよ大軍を率いて契丹遠征に臨んでいる。安祿山が契丹遠征を開始した動機については、『旧

『唐書』卷一九九契丹伝では、「天寶十年、安祿山誣其酋長欲叛、請拳兵討之。〔天寶十年、安祿山は、契丹の酋長が謀反を企てていると誣告し、軍を起こして契丹を討伐したいと玄宗に請願した。〕」とあり、『新唐書』卷二一九契丹伝では「祿山方幸、表討契丹以向帝意。〔安祿山は玄宗の行幸にあたり、上表し、契丹征伐を請願して、玄宗に気に入られようとした。〕」とある。この様な記述から、安祿山の契丹遠征が玄宗に阿る為に企てられた事が分かる。安祿山は、この年の二月に河東節度使に任命され、三節度使を兼任したばかりであったので、功名心に逸り、契丹征伐で戦果を挙げたがったとも考えられる。

しかし、安祿山は郷導の奚軍に裏切られ、奚軍と契丹軍に挟撃されて大敗した。安祿山自身も流れ矢にあたり、息子安慶緒に助けられ、夜闇に紛れて平盧城に逃げ帰った（『旧唐書』安祿山伝、『新唐書』卷二二五安祿山伝、『資治通鑑』卷二一六）。安祿山は大敗の後、雪辱戦を期して翌年の天寶十一載（七五二）三月、蕃漢の歩兵騎兵あわせて二十万の大軍勢を組織するが、この契丹遠征計画は、「阿布思の乱」の勃発により中止となる。阿布思の乱については、次章で見たいと思う。

（四）まとめ

天寶十載（七五二）、唐が大敗した南詔・大食・契丹は、いずれも唐にとっては新しいフロンティアであった。前章でも述べたように、こうした新しい地域に対する唐の応戦体制は未熟であり、かつ、フロンティアを絞ることも無く、南方・西方・北方と無制限に戦線を拡げてしまうなど、この時期の唐は、前代までに見られた明確な外交上の戦略性を失いつつあった。それに加えて、前線指揮官についても中央との繋がりで登用されるなど適性を欠く人材の配置も見られ、このため唐は失敗を重ねてしまったとも言える。

第四章 天寶十一載（七五二）～十二載（七五三）の大獄

阿不思の乱、王鉷の反逆事件、李林甫への糾弾

本章では、天寶十一載から十二載に起こった阿不思の乱、京兆尹王鉷の反逆事件、李林甫への糾弾等を取り上げ、時系列に沿って各々の事件を見てゆく。尚、本章については〔年表2〕も参照されたい。

（一）阿不思の乱〔天寶十一載（七五二）三月〕

朔方節度副使の阿不思は、突厥第二可汗国が滅亡する直前、唐に亡命してきた鉄勒の首領である。突厥においては、烏蘇米施可汗の西葉護であった。天寶元年（七四二）、烏蘇米施可汗がバスマル・ウイグル・カルルク連合軍に襲撃されて遁走した時、阿不思は葛臘哆と共に五千帳を率いて唐に亡命した〔『新唐書』突厥伝、『資治通鑑』卷二一五〕。阿不思が堂々たる風貌の持ち主で才知・策略に富んでいた為、玄宗は阿不思を気に入る、李猷忠の名を与え、奉信王に封じ、朔方節度副使に任命した〔『新唐書』安祿山伝、『資治通鑑』卷二一六〕。天寶八載（七四九）、隴右節度使の哥舒翰が吐蕃の堅城石堡城を攻撃する時、玄宗は阿不思に出撃を命じた。玄宗は阿不思の才略に期待し、哥舒翰を支援させたのである。哥舒翰は石堡城を陥落させ、八年ぶりに吐蕃の手から石堡城を奪還した。しかし、安祿山は阿不思の才能を忌み、強い敵対心を抱いていた。玄宗からの寵愛が出世の頼みの綱であった安祿山にとって、自分以上に玄宗から寵任され戦績を挙げる阿不思は脅威であり、強い警戒心を抱いたと考えられる。対する阿不思も、安祿山の下風に立つ事を嫌った。阿不思は鉄勒の首領であり、突厥可汗の西葉護も務めていた為、雑胡の安祿山を見下していたと思われる。

天寶十一載（七五二）三月、安祿山は蕃漢の歩騎二十万を率いて契丹への雪辱戦を計画したが、この時、玄宗に上奏し、阿不思に同羅の数万騎を率いさせ、共に契丹征伐に赴きたいと請願した。玄宗は安祿山の願いを聞き入れ、阿不思に対

し、安祿山と共に契丹を攻撃しよう命令した。阿不思は、天寶八載、哥舒翰の石堡城攻撃に加勢して石堡城の奪還に尽力したので、玄宗も、阿不思が安祿山を支援すれば契丹征伐でも戦果を得られると期待したと思われる。しかし、阿不思は安祿山に危害を加えられるのではないかと危惧し、出撃を拒否した。だが、それが許されなかった為、阿不思は麾下の軍勢を率いて倉庫を略奪すると漠北に逃走した。このため安祿山は契丹に出撃する事ができず、契丹遠征は中止となった。その後、阿不思は、唐の辺境地帯を略奪した（『新唐書』安祿山伝、『資治通鑑』卷二一六）。李林甫は、阿不思が反乱を起こすと自ら朔方節度使の職を辞し、河西節度使の安思順（安祿山の従兄弟）に職を譲りたいと玄宗に請願した。李林甫は天寶十載（七五一）より朔方節度使を務めており、朔方節度副使の阿不思は副官にあたる。李林甫は副官の謀反を理由に糾弾される事を恐れ、辞職を願い出たと思われる。玄宗は李林甫の辞職願を聞き入れ、安思順を朔方節度使に任命した（『旧唐書』『新唐書』李林甫伝）。

（二）京兆尹王鉉・王鐔兄弟の反逆事件（天寶十一載（七五二）四月）

天寶十一載（七五二）四月、楊国忠は、左相の陳希烈と共に、京兆尹の王鉉を謀反の罪で告発した（『旧唐書』卷一〇五王鉉伝、『新唐書』卷一三四王鉉伝、『資治通鑑』卷二一六）。王鉉は、京兆尹の他にも二十餘の使職を兼任し、權勢を誇っていた。王鉉は、李林甫が起こした疑獄事件にも関わり、李林甫の政敵肅清に加担した（『新唐書』李林甫伝）。しかし、天寶十一載四月、弟の王鐔が反逆事件²²を起こした為、楊国忠は王鉉を糾弾したのであった。玄宗は王鉉を信任していた為、この件を不問に付そうとし、李林甫は王鉉の為に弁明した。だが、楊国忠は王鉉も謀反に関わっていると断じ、王鐔を詮議して、王鐔が術士任海川に「わしに王者の相があるか」と尋ねた事、この事を知った王鉉が口封じの為に任海川を殺害した事などを明らかにした。これにより王鉉は自殺を命じられ、王鐔は朝堂で撲殺された。この翌月の天寶十一載五月、玄宗は、楊国忠を御史大夫、京畿・関内等の采訪使に任命し、王鉉の有していた使職を尽く与えた

〔資治通鑑〕卷二一六。玄宗は、王鉞兄弟の反逆を断罪した楊国忠を評価し、褒賞を与えたと思われる。

(三) 楊国忠の戦勝報告と捕虜献上〔天寶十一載（七五二）六月〕

王鉞が自殺した二ヵ月後の天寶十一載六月、楊国忠が玄宗に上奏し、吐蕃軍六十万⁽²³⁾が南詔に來援したので、劍南の兵が吐蕃軍を雲南で撃破し、故隰州等の三城で勝利した事、捕虜六千三百を得た事を告げた。楊国忠は、劍南から長安までの道のりが遠い為、捕虜の中から壮健なもの千餘人と降伏した酋長を選んで玄宗に献上した（『新唐書』卷五玄宗紀・吐蕃伝、『資治通鑑』卷二一六、『冊府元龜』卷四三四將帥部献捷）。楊国忠は、捕虜千餘人と降伏した酋長らを長安に連行する事で、自分の実力を玄宗や有力者達に誇示し、前年の敗戦を払拭して、戦勝を印象付けようと考えたのであろう。

(四) 李林甫への糾弾と李林甫の病死〔天寶十一載（七五二）十一月〕

楊国忠は、王鉞の自殺後、李林甫が阿布思と王鉞の謀反に関係していたと誣告し、左相の陳希烈と隴右節度使の哥舒翰も李林甫を糾弾した。このため玄宗は李林甫を疎んじるようになった。李林甫は、これに対し、楊国忠は任地の劍南に赴くべきであると玄宗に進言した。この頃、南詔が頻繁に入寇した為、蜀の住民が上奏し、劍南節度使楊国忠の赴任を希望していた。李林甫は、楊国忠を蜀に追いやり、玄宗の傍から遠ざけようと図ったのであろう。楊国忠は玄宗に泣きついて蜀への赴任を拒否したが、聞き入れられず、劍南に赴かざるを得なかった。しかし、李林甫は既に病床に伏し、天寶十一載十月には玄宗を拜する事もままならなかった。玄宗は、一旦は楊国忠を劍南に派遣したが、その後、楊国忠を召還した為、楊国忠は蜀に到着後、すぐに帰京した。楊国忠の帰京後、天寶十一年十一月、李林甫は病死した（『旧唐書』『新唐書』李林甫伝、『資治通鑑』卷二一六）。玄宗が一度は蜀に派遣した楊国忠をすぐさま呼び戻した理由は、李林甫の病が篤く、死期が近いと判断したからかも知れない。玄宗は、李林甫が務めていた右相の地位を楊国忠に与え、更に、楊国忠に文部尚書を兼任させ、その他の判使は従来そのままとした。楊国忠は、こうして李林甫を追い落とし、林甫に代

わって右相となった。

(五) 李林甫の官職剥奪〔天寶十二載（七五三）二月〕

楊国忠は、李林甫の死去後も林甫に対する攻撃の手を緩めず、安祿山に対し、李林甫が阿不思の謀反に加担していたと誣告するよう説得した。安祿山は楊国忠の説得に応じ、降服した阿不思の部下を証人として入朝させると、李林甫と阿不思が父子の約をしていた事、二人が謀反を共謀していた事などを誣告させた。玄宗は怒り、天寶十二載（七五三）二月癸未、李林甫の官爵を削って庶人に落とした。納棺前だった李林甫の遺体は、小棺に収められ庶人の礼で葬られた。李林甫の財産は没収され、子孫の官職は除名されて嶺南等に流された（『旧唐書』『新唐書』李林甫伝、『資治通鑑』卷二一六）。この後の二月己亥、玄宗は、楊国忠と陳希烈が李林甫の獄を成敗した事を賞して、楊国忠に魏国公、陳希烈に許国公の爵位を各々与えた（『資治通鑑』卷二一六）。

(六) 阿不思の乱の終息と安祿山〔天寶十二載（七五三）〕

一方、漠北に逃走した阿不思は、天寶十二載五月、ウイグルに襲撃されて敗走した。安祿山は、この時、阿不思の部落を誘って降服させた。こうして阿不思の軍団を吸収した安祿山の精鋭部隊は、これ以降、天下に及ぶものがなくなったという（『資治通鑑』卷二一六）。阿不思は、同年九月、カルルクに捕縛され、北庭都護の程千里によって長安に護送され、翌年の天寶十三載（七五四）、長安で処刑された（『旧唐書』卷一八七程千里伝、『新唐書』卷一九三程千里伝、『資治通鑑』卷二一六～卷二一七）。

(七) まとめ

以上の様に、天寶十一載～十二載、楊国忠は王鉷を肅清し李林甫を失脚させると、両人の官職を全て奪取して宰相に登り詰め、安祿山は阿不思を反乱に追いやって、その軍団を吸収し、唐で随一の精鋭を有するようになった。楊国忠も

安祿山も、性急かつ執拗に政敵を抹殺し、その地位や軍団を奪い取っている。第二章でも見たように、李林甫の腹心達に対する楊国忠の攻撃は天寶八載（七四九）より始まっており、いずれは李林甫本人に対する攻撃も開始される情勢ではあった。しかし、天寶十載（七五一）の南詔での大敗が、楊国忠を動揺させ、先手を打って李林甫に対する肅清を加速させた可能性も考えられる。

おわりに

李林甫を庶人に落とした直後の天寶十二載（七五三）五月より、楊国忠は玄宗に対し、安祿山に反状ありと讒言するようになった。また八月、楊国忠は、安祿山と不和だった隴右節度使の哥舒翰に河西節度使を兼任させ、西平郡王の爵位も授けて安祿山の対抗馬となした（『資治通鑑』卷二二六）。この後、楊国忠と安祿山の対立は激化し、楊国忠は玄宗に盛んに讒言を繰り返しては安祿山の失脚を画策した。

楊国忠は天寶十三載（七五四）六月、天下の兵を徴集し、劍南留後の李宓に南詔征伐を命じた。前年の天寶十二載（七五三）、南詔が、吐蕃の神川都知兵馬使論綺里徐と共に姚州を攻撃し、唐の將軍賈瓊を捕縛したため、楊国忠は大軍を派遣して南詔に対する反撃を試みたと思われる。李宓は十餘万（もしくは七万）の大軍で南詔を攻撃するが、南詔側が唐軍を誘い込んで籠城戦に持ち込んだ為、唐軍は疫病と飢渴に苦しみ、南詔軍と戦う前に兵士は十のうち八、九が死去した。李宓が退却を開始したところ、南詔軍が追撃した為、李宓は捕虜となり唐軍は壊滅した（『旧唐書』南詔蛮伝、²⁵『資治通鑑』卷二二七）。南詔德化碑によれば、天寶十二載の姚州攻撃と同様、吐蕃の論綺里徐が、天寶十三載にも南詔に加勢している。²⁶ 外交戦略を欠いた南詔への力攻めは失敗し、唐軍は再度、甚大な死傷者を出して惨敗した。楊国忠は再び南詔での敗戦を隠蔽し、偽りの戦勝報告を玄宗に上奏して失態を取り繕ったが、『資治通鑑』卷二二七は、鮮于仲

通が対南詔戦で失った兵力と併せて二十万の兵力を唐は南詔遠征で喪失したと述べている。

安祿山が挙兵するのは、李宓の敗戦から一年五ヶ月後の天寶十四載（七五五）十一月であるが、安祿山は南詔遠征での唐軍の惨敗を見て、唐王朝に対して軽侮の念を抱いたかも知れない。安祿山は、天寶十三載（七五四）四月、奚を撃破して奚王の李日越を捕縛し（『資治通鑑』卷二二七）、天寶十四載（七五五）三月には契丹を撃破しており（『新唐書』卷五玄宗紀）、楊国忠とは対照的に順調に戦果を挙げている。契丹軍の撃破は挙兵する八ヶ月前の出来事であり、安祿山麾下の將兵も、契丹に勝利した事で士気が高揚していたと思われる。また、契丹の撃破によって、安祿山は後顧の憂いなく唐に対して叛旗を翻す事ができたのかも知れない。安祿山の挙兵後、唐は河西・隴右の軍勢を東方に移動させ、潼関の守りを固めさせて安祿山の進撃を阻止しようとした。しかし、唐軍が東に移動した隙を吐蕃に衝かれ、河西・隴右が吐蕃軍に占領されてしまう。プーリイブランク氏は、南詔との戦いで二十万もの損害を出した唐王朝にとって、頼みとなる軍隊は無傷だった河西・隴右・朔方の軍隊であったと分析している。唐にとって、南詔に対する度重なる大敗は軍事的にも外交的にも大きな痛手であった。南詔は吐蕃に臣従して唐と敵対するようになり、安史の乱勃発直後は、対南詔戦における敗戦の痛手の為に唐は応戦体制が整えられず、吐蕃軍の河西・隴右への侵攻を促した。また、安祿山に対しても南詔での惨敗が唐朝の軍事力の弱体化を示した可能性も考えられる。

最後に、この時期の唐の外征・対外政策をまとめると、大まかには、対外政策が成功している地域と失敗している地域に二分される。対外戦略が成功している地域の代表は、突厥と吐蕃であった。この二国に対しては唐も戦闘方法や外交戦略を熟知しており、突厥攻略の為に周辺諸族（バスマル・ウイグル・カルルク）を後押しして天寶四載（七四五）突厥を滅亡へと導き、天寶六載（七四七）～八載（七四九）、青海で吐蕃の要塞を奪取し、パミールでは親唐国家を樹立する等して、吐蕃の中央アジアへの進撃をある程度阻止した。また、日本・新羅・渤海とは比較的安定した友好的関

係を維持していた。⁽²⁸⁾これに対して、唐の対外戦略が失敗した地域は、契丹・南詔・大食であり、これらはいずれも唐にとって新しいフロンティアであった。これらの地域に対しては唐の応戦体制は未熟な上、前線指揮官も適性よりも中央との繋がりで登用されている。そして、戦端を絞らず南方・西方・北方と無思慮に戦線を拡げてしまうなど、この時期の唐は外交的な戦略性を失いつつあった。これらが要因となつて、唐は一年に三度の大敗を喫してしまったと考えられる。また、この時期の唐の特徴としては、玄宗や楊国忠など個人の好みで国家の政策や人事が決定された事、宰相や前線將軍の行動原理が私利私欲にあった事、唐王朝内部での権力闘争と対外政策（外征と敗戦）が密接に関わっている事などが挙げられる。これらの諸矛盾が複合した形で帝国は迷走し、最終的に安史の乱に至るのである。

註

- (1) 安史の乱に関しては、プーリイブランク「安祿山の叛乱の政治的背景」『東洋学報』三五卷二号、一九五二年）、「安祿山の叛乱の政治的背景（下）」（『東洋学報』三五卷三・四号、一九五三年）、谷川道雄「『安史の乱』の性格について」（『名古屋大学文学部研究論集』八号、一九五四年）等。
- (2) W. Barthold, *Turkestan down to the Mongol Invasion*, London 1928. 前嶋信次「タラス戦考」『東西文化交流の諸相——民族・戦争』（誠文堂新光社、一九八二年）等。
- (3) 拙稿「八世紀前半の唐・突厥・吐蕃を中心とする国際情勢——多様な外交関係の形成とその展開」（『史窓』六七号、二〇一〇年）、「唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義——安史の乱以前の二度の会盟を中心に」（『日本西蔵学会々報』五六号、二〇一〇年）。

- (4) 片山章雄「突厥第二可汗国末期の一考察」(『史朋』十七号、一九八四年)等。
- (5) 例えば、唐は、景龍二年(七〇八)から景龍四年(七一〇)にかけて反突厥であった突騎施・キルギスと連合し、開元八年(七二〇)には契丹・奚、バスマルと連合して、各々突厥を挾撃する計画を立てている。拙稿(3)論文。尚、太宗は薛延陀などの鉄勒諸部を離反させて突厥第一可汗国(東突厥)を滅ぼした。
- (6) 安祿山に関しては、プーリイブランク「安祿山の出自について」(『史学雑誌』六一卷四号、一九五二年)、藤善真澄「安祿山」(中央公論新社、二〇〇〇年、初版は一九六六年)、森安孝夫「シルクロードと唐帝国」(講談社、二〇〇七年)、森部豊「ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開」(関西大学出版部、二〇一〇年)等。
- (7) 『資治通鑑』、呉延燮『唐方鎮年表』全三卷(中華書局、二〇〇三年)等。
- (8) 吐蕃については、佐藤長『古代チベット史研究』上(東洋史研究会、一九五八年)、森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」(『金沢大学文学部論集・史学科篇』四号、一九八四年)。
- (9) 藤澤義美『西南中国民族史の研究―南詔国の史的研究』(大安、一九六九年)。林謙一郎「南詔国の成立」(『東洋史研究』四九卷一号、一九九〇年)、「南詔王権の確立・変質と唐・吐蕃関係」(『唐代史研究』一二号、二〇〇九年)。
- (10) 吐蕃と小勃律の関係については、森安(8)論文三七〜四二頁、王堯・陳踐訳注『敦煌本吐蕃歷史文書(増訂本)』(民族出版社、一九九二年)一五三頁、一八四注五一、小谷伸男・菅沼愛語「『新唐書』西域伝訳注(二)」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』十号、二〇一一年)を参照。
- (11) 羯師は『新唐書』吐火羅伝で羯師、『資治通鑑』で羯師である。本稿では羯師とする。吐蕃と羯師の関係については、森安(8)論文四二〜四三頁、小谷・菅沼(10)論文。
- (12) 小谷・菅沼(10)論文。

- (13) 藤澤 (9) 論文、林 (9) 論文。尚、安寧城の建築は現地民西爨の反発を招き、築城の為の唐の使者が西爨に襲撃された。
- (14) 張虔陀の官職は『旧唐書』南詔蛮伝、『資治通鑑』では雲南太守であるが、藤澤氏 (藤澤 (9) 論文二五一頁) は姚州都督であると考察しており、本稿もこれに従った。
- (15) 敦煌出土のチベット語編年記によれば、開元二十一年 (七三三)、南詔王の皮羅閣は吐蕃に表敬訪問している。王堯
- (10) 文献一五三頁、一八四頁注四九。大原良通『王権の確立と授受―唐・古代チベット帝国 (吐蕃)・南詔国を中心として』 (汲古書院、二〇〇三年) 一九二―一九三頁。
- (16) 藤澤 (9) 論文、林 (9) 論文、大原 (15) 論文。
- (17) 藤澤 (9) 論文二九七頁、大原 (15) 論文一九三―一九四頁。
- (18) 鮮于仲通は、『編急寡謀』 (『旧唐書』南詔蛮伝)、「卞忿少方略」 (『新唐書』南詔伝)、「性褊急、失蛮夷心」 (『資治通鑑』卷二二六) と評され、短気で謀に欠ける人物だった。
- (19) 白居易の「新豊折臂翁」 (『新樂府』) は、雲南 (南詔) 遠征の兵役から逃れる為に自らの臂を切断した老人の事を詠っている。この詩で詠われている天寶の大徴兵は、楊国忠が行った南詔征伐の為の大規模な徴兵の事を指す。藤澤 (9) 論文二六八頁、高木正一『白居易』上 (岩波書店、一九九七年) 五二―五八頁。
- (20) 前嶋 (2) 論文九三―九六頁。
- (21) 前嶋 (2) 論文一〇四頁。
- (22) 王鐔は、友人の邢縡と共に反乱を起こして李林甫・陳希烈・楊国忠を殺害する計画であったが、決行の二日前にこれを告げるものがあって陰謀が露見した。
- (23) 吐蕃軍の兵力は『新唐書』吐蕃伝では六万と見え、史料によって兵数が異なる。藤澤氏 (藤澤 (9) 論文二六六頁) は、

六十万は偽奏か誇張であろうと考察している。

(24) 藤澤(9) 論文二六六頁、大原(15) 論文一九四頁。

(25) 現在、雲南省大理市の天寶公園にある「天寶万人塚」は、南詔王の閣羅鳳が、戦死した唐の兵士を葬った塚であると
言われている。

(26) 藤澤(9) 論文二六六頁、大原(15) 論文一九五頁。

(27) プーリイブランク(1) 論文(下) 三五二頁。

(28) この時期の東部ユーラシア世界と日本史との相関について、最近の研究としては、廣瀬憲雄「倭国・日本史と東部ユー
ラシア―六―一三世紀における政治的連関再考」(『歴史学研究』八七二号、二〇一〇年)等がある。

年表 1 契丹・南詔・吐蕃及び中央アジアでの戦い（天寶 3 載～天寶 14 載）

年代	安祿山（対契丹）	楊国忠（対南詔）	哥舒翰・高仙芝（対吐蕃・中央アジア）
天寶 3 (744)	3 月 安祿山が范陽節度使に就任、平盧・范陽の 2 節度使を兼任		
天寶 4 (745)	3 月 静楽公主が契丹、宜芳公主が奚に降嫁。9 月 契丹・奚は公主を殺して反乱し、安祿山がこれを討伐		
天寶 6			高仙芝の小勃律攻略
天寶 8			6 月 哥舒翰が吐蕃から石堡城を奪取
天寶 9 (750)	10 月 安祿山が奚の捕虜 8 千人を献上	鮮于仲通が楊国忠の推薦で劍南節度使に就任。 南詔が、姚州都督張虔陀を攻め殺して 32 州を奪取。	3 月頃 高仙芝が羯胡を破り、王の勃特没を捕縛。12 月 高仙芝は偽って石国と和約後、石国を襲撃し石国王を捕縛→石国王子・諸胡が大食に加勢を要請
天寶 10 (751)	2 月 安祿山が河東節度使に就任し、平盧・范陽・河東の 3 節度使を兼任。 8 月 安祿山が范陽・平盧・河東の軍勢を率いて契丹を攻撃するが大敗	4 月 鮮于仲通が南詔に大敗。 この後、楊国忠が大規模な徴兵を行い南詔への雪辱戦を計画。 11 月 楊国忠が劍南節度使に就任	正月 高仙芝が入朝し捕縛した羯胡王・石国王・吐蕃酋長らを献上。 7 月 高仙芝がタラスで大食軍に大敗【タラス河畔の戦い】
天寶 11 (752)	3 月 安祿山が范陽・平盧・河東の蕃漢の歩騎 20 万を徴発し、契丹への雪辱戦を計画するが、阿布思の乱により契丹討伐は中止	6 月 国忠が雲南で吐蕃軍を撃破したと戦勝報告 【前年度の雪辱戦】	
天寶 13 (754)	4 月 安祿山が奚を撃破し、奚王の李日越を捕縛	6 月 劍南留後の李宓が 10 餘万で南詔を攻撃するが大敗。	
天寶 14 (755)	3 月 安祿山が契丹軍を撃破 11 月 安祿山が募兵【安史の乱勃発】		

年表 2 中央政界での権力闘争と唐の外征及び対外政策

年代	中央政界での権力闘争	外征及び対外政策
天寶 8 (749)	楊国忠が、京兆尹の蕭嵩（李林甫の腹心）を取賄罪で誣告し左遷させる	6 月 哥舒翰が青海にある吐蕃の要衝石堡城を奪還
天寶 9 (750)	4 月 楊国忠が、宋渾（李林甫の腹心）を取賄罪で誣告し流刑に処す。楊国忠が鮮于仲通を劍南節度使に推薦	南詔が姚州都督の張虔陀を攻め殺し夷州 32 州を奪取
天寶 10 (751)	正月 李林甫が朔方節度使に就任 11 月 楊国忠が劍南節度使に就任	4 月 鮮于仲通が南詔で大敗 7 月 高仙芝がタラス河畔の戦いで大敗 8 月 安祿山が契丹で大敗
天寶 11 (752)	3 月 阿布思（李林甫の副官）が反乱 4 月 京兆尹王鉷（李林甫の腹心）が弟の反逆事件に連座し自殺。李林甫が、阿布思・王鉷の謀反に関わっていたと誣告され、11 月に病死	3 月 安祿山が契丹遠征を計画するが、阿布思の乱の勃発により出撃は中止 6 月 楊国忠が雲南で吐蕃軍を撃破したと戦勝報告
天寶 12 (753)	2 月 安祿山が楊国忠と結託し、李林甫と阿布思の共謀を誣告した為、李林甫は庶人に落とされる 5 月 阿布思がウイグルに撃破されて敗走。安祿山は阿布思の軍団を吸収し唐内随一の精鋭を有するようになる 5 月 楊国忠が玄宗に対し「安祿山に反状あり」と讒言するようになる 9 月 阿布思が捕縛され、翌年、処刑される	吐蕃軍が南詔と共に姚州を奪取 5 月 何履光が嶺南五府の軍を率いて南詔を攻撃 5 月 哥舒翰が吐蕃軍を撃破し、洪濟・大漠門等の城を奪取し、九曲を奪還

年表 3 唐と吐蕃の戦い：直接対戦と諸国の支配権を巡る争奪戦

年代	唐と吐蕃の直接対戦	諸国を巡る唐・吐蕃の争奪戦
天寶 6 (747)		高仙芝が小勃律を攻略し、親吐蕃の小勃律王を捕縛【小勃律の支配権が吐蕃から唐へ】
天寶 7 (748)	哥舒翰が青海に神威軍を築いて吐蕃軍を撃破し、青海の龍駒島にも築城	
天寶 8 (749)	6 月 哥舒翰が石堡城を吐蕃より奪還【青海で唐が優勢】	
天寶 9 (750)		高仙芝が羯師を破り、親吐蕃の王勃特没を捕縛。3 月 勃特没の兄を冊立【羯師の支配権が吐蕃から唐に】南詔が姚州都督張虔陀を攻め殺し 32 州を奪取
天寶 10		4 月 鮮于仲通が南詔に大敗
天寶 11 (752)	6 月 楊国忠が雲南で吐蕃軍を撃破したと戦勝報告	正月 吐蕃が南詔王を賛普鐘・東帝とし金印を授与
天寶 12 (753)	哥舒翰が吐蕃を撃破し、洪濟・大漠門等の城を奪取し、九曲を奪還	吐蕃軍が南詔軍と共に姚州を攻撃 5 月 何履光が嶺南五府の軍勢を率いて南詔を攻撃
天寶 13 (754)		6 月 劍南留後の李宓が 10 餘万で南詔を攻撃するが、南詔・吐蕃連合軍に大敗

年表 4 唐と南詔の戦い、吐蕃の南詔支援

年代	唐軍 対 南詔軍及び吐蕃の援軍（史料）
天寶 9	南詔が、姚州都督張虔陀を攻め殺し 32 州を奪取（『旧』『新』南詔伝、『通鑑』）
天寶 10	4 月 劍南節度使の鮮于仲通が南詔に大敗（『旧』『新』南詔伝、『通鑑』、德化碑）
天寶 11 (752)	正月 吐蕃が南詔王を賛普鐘・東帝とし金印を授与（『旧』『新』南詔伝、『通鑑』、德化碑） 6 月 楊国忠が雲南で吐蕃軍を撃破したと戦勝報告（『新』玄宗紀、『通鑑』）
天寶 12 (753)	南詔・吐蕃連合軍が姚州を攻撃（德化碑） 5 月 何履光が嶺南五府の軍勢を率いて南詔を攻撃（『新』南詔伝、『通鑑』）
天寶 13 (754)	6 月 劍南留後の李宓が何履光と共に南詔を攻めるが、南詔・吐蕃連合軍がこれを迎撃し、唐軍は大敗（『旧』『新』南詔伝、『通鑑』、德化碑）

※ 『旧』 = 『旧唐書』、『新』 = 『新唐書』、『通鑑』 = 『資治通鑑』、德化碑 = 南詔德化碑

表 1 節度使の変遷と任期（天寶元年～天寶 14 載）

年代	河西	隴右	朔方	河東	平盧	范陽	劍南	安西		
天寶元 (742)	王倓	皇甫惟明 (5 年間)	王忠嗣 (開元 29 より 6 年間)	田仁琬 (開元 29 より 2 年間)	安祿山 (14 年間)	裴寬 (3 年間)	章仇兼瓊 (開元 27 より 8 年間)	夫蒙靈督 (開元 29 より 7 年間)		
天寶 2 (743)	不明			不明		裴寬→ 安祿山				
天寶 3 (744)										
天寶 4 (745)									王忠嗣 (2 年間)	
天寶 5 (746)	皇甫惟明 →王忠嗣	皇甫惟明 →王忠嗣	王忠嗣 →張齊丘	章仇兼瓊 →郭虛己						
天寶 6 (747)	王忠嗣 →安思順	王忠嗣 →哥舒翰	張齊丘 (5 年間)	不明		安祿山 (12 年間)	郭虛己 (4 年間)	夫蒙靈督 →高仙芝		
天寶 7 (748)	安思順 (6 年間)	哥舒翰 (9 年間)					張齊丘 →安思順	韓休琳 →安祿山	鮮于仲通 →楊國忠	高仙芝 (5 年間)
天寶 8 (749)										
天寶 9 (750)										
天寶 10 (751)										
天寶 11 (752)	哥舒翰 (3 年間)	安思順 (4 年間)	安祿山 (5 年間)	王正見 →封常清						
天寶 12 (753)										
天寶 13 (754)						封常清 →梁宰				
天寶 14 (755)										

※ 安祿山が平盧節度使に就任した天寶元年から、安史の乱が勃発する天寶 14 載までの期間の節度使の変遷。

※ 『資治通鑑』、吳延燮『唐方鎮年表』（全 3 巻、中華書局、2003 年）をもとに作成。

表 2 節度使の兼任数

氏名	兼任数	兼任年数	兼任した節度使名
王忠嗣	4	数ヶ月間：天寶 5 (746)	河西・隴右・朔方・河東
	2	1 年間：開元 29 (741)	朔方・河東
		2 年間：天寶 4 (745) ～ 5 (746)	
安祿山	3	2 年間：天寶 5 (746) ～ 6 (747)	河西・隴右
		5 年間：天寶 10 (751) ～ 14 (755)	平盧・范陽・河東
	2	12 年間：天寶 3 (744) ～ 14 (755)	平盧・范陽
信安王緯	2	5 年間：開元 20 (732) ～ 24 (736)	朔方・河東
牛仙客	2	3 年間：開元 26 (738) ～ 28 (740)	朔方・河東
哥舒翰	2	3 年間：天寶 12 (753) ～ 14 (755)	河西・隴右
蓋嘉運	2	1 年間：開元 28 (740)	河西・隴右
皇甫惟明	2	数ヶ月間：天寶 5 (746)	河西・隴右

※ 『資治通鑑』、吳延燮『唐方鎮年表』をもとに作成。